【優秀論文】

「聞く」ことの意義

～東日本大震災の語り部に基づく胸に迫る「語り」～

3年4組4番　石川椛乃

Ⅰ　はじめに

2011年3月11日午後2時46分、日本の歴史に名を残す大災害が発生した。地震による東日本沿岸部を襲った大津波の影響で、亡くなった人の死因の90％が溺死だった[1]。また首都圏では、交通機関が不通となったため大量の帰宅困難者が発生した。2024年3月11日の時点で死者は19,775人、行方不明者は2,550人に上る[2]。気象庁はこの地震を「東北地方太平洋地震」と命名し、これによって引き起こされた災害の名称を「東日本大震災」とした[3]。三陸沖深さ24kmを震源とした地震で、マグニチュードは9.0、最大震度は7.0だった。

2024年現在、震災から13年が経った。これほど年月が経っているにも関わらず、避難所生活を余儀なくされている人や家族が見つかっていない人は未だ多く存在する。さらに2024年1月1日に能登半島地震が発生し、また同年8月8日には日向灘で発生したマグニチュード7.1の地震が南海トラフ地震の想定震源内だったため、政府は「南海トラフ地震臨時情報（巨大地震注意）[4]」を発表した。日本は4つのプレートの境目にある地震大国であり、常に大地震を想定して備えることを忘れてはならない。今後起きるかもしれない地震に対処するためには、過去の教訓を生かすことが不可欠である。過去の大震災のときに何が起こり、人々がどう動き、どのように感じたのかということは、広く周知されるべき重要な情報となる。

このような情報を多くの人達に知らせるために、自身の被災経験を多くの人々に伝える「語り部」活動が存在する。この活動は、そのとき、その場にいた記憶をありのままに言葉にし、震災を後世に伝える貴重な役割を果たす。「語り部」は自らの言葉を直に伝えることで、時が過ぎるにつれ知らない人が増えてしまう大震災の記憶を風化させないようにしている。学校の教科書で簡単に触れたり、テレビやインターネットで映像を見たりしただけという人達にとって、大震災は今ひとつ現実味が湧かないものになっているかもしれない。それよりも、直接、目の前で語りを聞いた方が、経験した方の思いを受け止め、多くのことを考えるようになり、教訓を切実に受け継ぐと考えられる。実際、筆者もそうだった。研修旅行で聞いた語りが忘れられず、減災や防災について大いに考え続ける経験となっている。

過去の震災について知るには「語り」を「聞く」ことが有効な手段だと考える。本論文では、東日本大震災の語り部を題材に、語りを聞く受け手の感情の変化や音声と文字との違いを追究し（Ⅱ）、その効果と語り部の話の展開、昨年度参加した研修旅行[5]で語りを聞いた経験（Ⅳ）を取り上げ、聞くことの意義について考察したい（Ⅴ）。

Ⅱ　震災語り部の実態

震災の記憶を口承で伝える「語り部」は、東日本大震災だけではなく、その他の災害にも存在する。本来語り部は、「古代、文字のなかった時代に昔から伝えられる歴史、民話、神話、昔話、家訓や伝承などを口承で語り伝えることを職掌としていた人々」[6]として定義されている。つまり、

---

[1] 宮城県災害復興本部（2011）「みやぎ復興のたび」https://www.pref.miyagi.jp/site/miyagifukkounotabi/overview/index.html　2024年8月9日閲覧

[2] 高村昇（2020）「東日本大震災・原子力災害伝承館」https://www.fipo.or.jp/lore/about　2024年8月9日閲覧

[3] 脚注1に同じ

[4] 8月8日のM7.1の地震に伴って、大規模地震の発生可能性が平常時に比べて相対的に高まっていると考えられたことから発表された。政府ではその後、1週間経過したことから8月15日17時をもって「南海トラフ地震臨時情報（巨大地震注意）」を終了した。国土交通省気象庁（1996）「南海トラフに関する情報」『南海トラフ地震関連解説情報（第8号）』（2024）2024年8月26日閲覧https://www.jma.go.jp/jma/kishou/info/coment.html

[5] 2024年1月10日から13日の三泊四日で震災学習を目的にし、東北を訪れた。現地では6人の語り部の方からお話を聞いた。

古くから伝わる日本の伝統文化として重宝される職人だ。東日本大震災では「震災語り部」が多く知られており、後世で同じ悲劇が繰り返されないよう活動を続けている。特に大きな被害を受けた宮城県気仙沼市、東松島市で多くの語り部活動が見られ、また福島県では原発事故[7]の被害を受けた語り部が多く存在する[8]。震災遺構[9]で活動する語り部は、その施設ならではの伝承効果が認められており、全国各地から観光客が訪れている。

このような活動を続ける中で、家族や知人を亡くした場所を観光地とされたり、震災遺構として残すことに心理的抵抗を感じている語り部の方も多く存在する[10]。「自身も被災者であ」り、「特に震災遺構で語り部ガイドを行うことは葛藤が大きい」[11]と感じながらも活動を続けている。つらい思いを胸に秘めながらも私達に過去の経験を伝えてくださる「震災語り部」の活動は、尊く貴重な活動である。2020年4月の震災語り部の年代別の人数は図1の通りである。

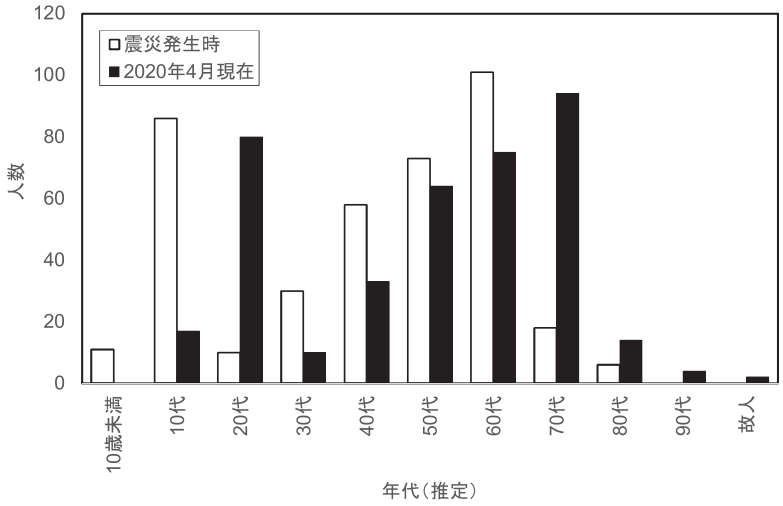

図1　震災語り部・被災地ガイドの空間分布[12]

図1より、2020年4月の段階で語り部・被災地ガイドとして活動しているのは、震災当時10代と60代であり、現在の年齢は20代と70代が割合を多く占めている[13]。つまり、震災当時10代と60代であった人が10年に渡って語り部として活動していることが多いということが分かる。他の震災の語り部と比較すると、阪神・淡路大震災の語り部の年齢層は、全体の54％が70代を占めており、高齢化が進んでいることが問題点となっている[14]。これに対し、東日本大震災の語り部は若い世代が多く、幅広い年齢層で活動していることが特徴だと言える。次に、各年代の割合を性別ごとにまとめた表を見てみたい。

---

[6] 冨田静香（2009）「一般社団法人語り部協会」https://www.pref.ishikawa.jp/shinkou/dukurikyou/group/n093.html 2024年6月10日閲覧

[7] 地震によって外部電力が失われた東電福島第一原発が、その後の津波により全電源が喪失。原子炉3基で冷却機能が失われ、炉心が溶け出し、3機が爆発して放射性物質が放出された。「福島第一原子力発電所事故（2011）」は震災の二次被害として歴史に名を刻んでいる。

[8] 佐藤翔輔（2020）「東日本大震災の被災地における震災語り部・被災地ガイドの年代・性別・区間分布」『東日本大震災特別論文集No.9,2020.7』、地域安全学会、p.74

[9] 被災地の様子を伝える建造物・構造物のこと

[10] 西坂涼、古谷勝則（2018）「東日本大震災の震災遺構で活動する語り部ガイドの成立及び活動の経緯―宮城県石巻市の語り部ガイドを対象にSCATによる分析を通して―」『日本観光研究学会機関誌』p.17

[11] 脚注8に同じ

[12] 佐藤翔輔（2020）「東日本大震災の被災地における震災語り部・被災地ガイドの年代・性別・区間分布」『地域安全学会東日本大震災特別論文集』No.9、地域安全学会、p.74

[13] 脚注8に同じ

[14] NHKNEWS（2024）「『記憶がなくても』語り継ぐ29歳も阪神・淡路大震災語り部の今」に掲載の表「阪神・淡路大震災語り部の年齢層」（神戸大学山地久美子特命准教授調査）https://www3.nhk.or.jp/news/html/20240114/k10014320401000.html2024年6月10日閲覧

年代	男性	女性	計
10代	3	14	17
	1.6%	6.7%	4.3%
20代	18	62	80
	9.8%	29.5%	20.4%
30代	7	3	10
	3.8%	1.4%	2.5%
40代	13	20	33
	7.1%	9.5%	8.4%
50代	28	36	64
	15.3%	17.1%	16.3%
60代	43	32	75
	23.5%	15.2%	19.1%
70代	63	31	94
	34.4%	14.8%	23.9%
80代	8	6	14
	4.4%	2.9%	3.6%
90代	0	4	4
	0.0%	1.9%	1.0%
故人	0	2	2
	0.0%	1.0%	0.9%
計	183	210	393
	100%	100%	100%

表1　震災語り部・被災地ガイドの年代・性別分布[15]

表1より、語り部の人数が多い割合で共通している世代は60代である。しかし次に多い世代として、男性は70代、女性は20代と男女で大きな年齢差が出ていることが分かる[16]。女性は若い世代も語り部を務めているのに対して、男性の語り部は中高年に集中している。これは、男性の多くが定年で仕事を辞めた後の活動として語り部を始めるためではないだろうか。いずれにせよ、幅広い年齢層の語り部から震災について口承されることによって、聞き手は各世代の考え方や捉え方の違いを知ることができる。

筆者は2024年1月に研修旅行[17]で東北を訪れ、初めて語り部の話を生で聞いた。その時、今まで小学校から蓄積してきた震災学習が全て吹き飛ぶかのような衝撃を受けた。まるで自分がその時そこにいたかのような空気感が場に生じ、教科書やテレビでしか見なかった「東日本大震災」を肌身で受け止めているのを実感した。

なぜ震災の映像や写真を「見る」ことより、実際に語り部から対面で話を「聞く」ことの方がより胸に迫るのであろうか。Ⅲ章とⅣ章では、筆者の研修旅行での体験と共に、言動的行動・非言動的行動、オノマトペなどに基づいて震災語り部の話を分析し、実際に見て聞くことの必要性について述べていきたい。

[15] 出典は図1と同じ
[16] 脚注8に同じ
[17] 2年次に行く修学旅行。筆者の高校では研修旅行と呼び、学習内容に従ってマレーシア、韓国、沖縄、奄美大島、東北の5つのコースから選ぶことができる。

Ⅲ　なぜ「語り」が人の心を動かすのか

(1) 心を動かす2つの鍵

「語り」がなぜ人の心を動かすのかということを考察するにあたり注目したいのは、非言語的行動だ。対人コミュニケーション過程には言語情報だけでなく無数の非言語情報が含まれ、意識化される程度は少なくても非言語的行動に表出やそこから得られる情報は、むしろ言語的行動よりも多いとされる[18]。したがって心を動かす一つ目の鍵となるのは、ことばでは表せられないもの、つまり「非言語的行動」の影響である。

ジェスチャーは、発話内容を補足したり強調したりする機能があり、それが最も話し手の印象を決定づける情報となる。加えてジェスチャーは話し手が意図した情報の伝達だけではなく、聞き手の情報の解読にも重要な役割を担う[19]。実際、筆者もお話を聞いた時、ジェスチャーによってその語り部さんのことばを超えた感情が伝わったことを実感した。

コミュニケーションにおける間の使い方も大切である。「語り」における間は、話し手にとって単語や節の区切りをつけ、感情を表現し、息を継ぐのに必要な時間であり、聞き手にとっては話の内容や話者の感情表現を理解するために欠くことのできない時間である[20]。また、間の長短で話の印象が変化することも明らかになっている。下の図は間の時間によって抱く印象の違いを示したものだ。

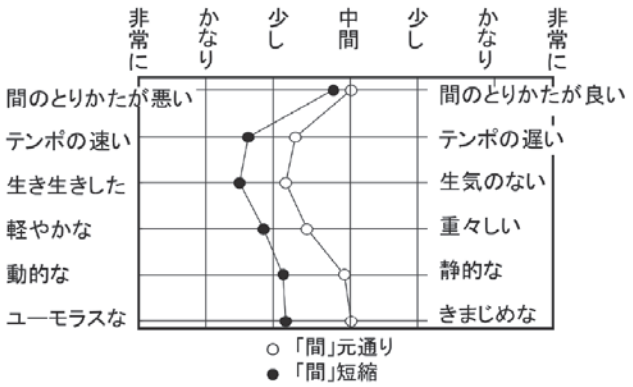

図2「間」の長短による印象の違い[21]

上の図より、間の時間を短くするとユーモラスで軽やかな雰囲気になり、間の時間が長いと真面目で重々しい雰囲気になっていることが分かる。このように、わずかな間の時間の違いが話の印象の差異をもたらしているのだ[22]。震災語り部の方のお話は重々しく真剣な内容であるため、間が長いのではないかと推測出来る。このことはⅣ章で改めて確認したい。

心を動かす二つ目の鍵として、「当事者から聴くこと」が大きく影響している。本人と本人ではない人（弟子）から聴いた場合、特に大きな差を示していたのが記憶の持続性だという研究がある。受け手の8ヶ月後の記憶力を分析した結果、本人による「語り」の方が約2倍の記憶力があることが明らかになっている[23]。記憶力が高いということはその話を忘れにくい、つまり、震災の辛さや悲しさを1秒でも長く心に刻んでほしいという語り部の方の思い[24]が、人々の心に伝

---

[18] 磯友輝子（2001）「話し手の非言語的行動が「話の上手さ」認知に与える影響：発話に伴うジェスチャーに注目して」『対人社会心理学研究.2001,1,p.133-146』p.2
[19] 脚注16に同じ
[20] 中村敏枝（2009）「コミュニケーションにおける「間」の感性情報心理学」『音声研究』第13巻第1号、日本音声学会、45頁
[21] 同前
[22] 同前
[23] 佐藤翔輔,邑本俊亮,新国佳祐,今村文彦（2019）「震災体験の「語り」が生理・心理・記憶に及ぼす効果：語り部本人・弟子・映像・音声・テキストの違いに着目した実験的研究」『地域安全学会論文集』地域安全学会、No.35、p.121
[24] 2024年1月に東北を訪れ、語り部さんからお話を伺った際、「私たち語り部が共通して思っていることは、この悲劇を二度と起こしたくない、自分たち以外にこんな経験を味わってほしくないということだ。そのためには、皆がこの出来事を心に留めておかなければならないのだ」とおっしゃっていた。

わっていることが分かる。心に沁みる記憶となるのは当事者からの生語りが最も効果的であり、可能な限り体験当事者から「語り」を生で聴くことが受け手にとって重要となる。被災した当事者からしか得られないオノマトペや方言も、記憶に長く残る重要な要素となっているだろう。

オノマトペとは別名擬態語、擬音語とも呼ばれ身体感覚や気持ちを表すことばとして使われ、動きや存在の様子を感覚的に表現することで聞き手がその情景について理解したり、想像しやすくなったりする効果がある[25]。筆者が実際にお会いした震災当時小学生であった語り部の方は、小学生ならではの直感的なオノマトペを多く使っており、子供心に感じていたことが素直に伝えられた[26]。若い世代ならではの「語り」の手法で、受け手の心を動かすものもあるのだと感じた。

筆者が実際に現地に足を運んでお話を聞いた際、最初に東北に来たことを実感したのは方言を聞いたことによる。方言が用いられることで、地域性、独自性、個性化、意外性、迫真力の効果[27]を受け取ることができた。たとえば、スーパーの地方産商品のPOPで方言を使っているような商品の生産地をアピールするものがある。このような方言の使用は、「方言の拡張法」[28]と言う。特に「語り」において必要な効果は、方言で強い地域色を出すことが出来る地域性と、その地域の人々の心情を率直・素直に表現できる迫真力だ。私たちが普段使うことのない言語によって、そのことばに特別感が生まれ、より一層話に惹きつけられる。また、使っていることばは同じでも、イントネーションの違いから地域色が感じられることもある。

以上により「非言語的行動の影響」「当事者から聴くことの意義」の2つが人の心を動かす鍵となり、重要な役割を担っている。

(2) 語りによる受け手の感情変化

「語り」を聞くことによって受け手はどのような影響を受けるのだろうか。本人から聞くことが人の心を動かす鍵であれば、当事者の語りを他の媒体に複製したものと比較したとき、生理反応と心理変化に差が生じるだろう。本節では、佐藤ら（2019）の研究に注目したい。佐藤らは、語り部M氏の実際の体験話を実験材料として、生語り（本人）、生語り（弟子）、映像、音声、テキストの5つの媒体を用意し、それぞれの媒体で参加者を用意し、実験を行った[29]。以下の資料は、佐藤らが参加者の人数・性別・平均年齢をまとめたものである。

	参加人数			平均年齢（SD）
	全体	男性	女性	
生語り（本人）	18	9	9	24.5（7.1）
生語り（弟子）	16	7	9	28.7（10.0）
映像	19	11	8	26.5（11.3）
音声	18	8	10	23.1（5.8）
テキスト	17	10	7	21.3（1.5）
計	88	45	43	24.8（8.2）

表2　実験参加者の人数・性別・平均年齢[30]

[25] 竹田晃子（2012）『東北方言オノマトペ用例集（擬音語・擬態語）―青森県・岩手県・宮城県・福島県―』国立国語研究所
[26] Ⅳ章で紹介する佐藤瑞記さんの「語り」を指す
[27] 亀田裕見（2013）「首都圏における方言の地域資源としての活用―通信調査の結果から―」『都市言語セミナー11』にてポスターでの発表
[28] 同然
[29] 同前
[30] 出典は脚注23に同じ

まず、実験中の参加者の生理反応に着目して、心拍数を計測している。その後、参加者の耳たぶに心拍数センサーを装着し、安静時と比べてどれだけ心拍数が増加したかを比較している。実験結果は以下の通りだ。

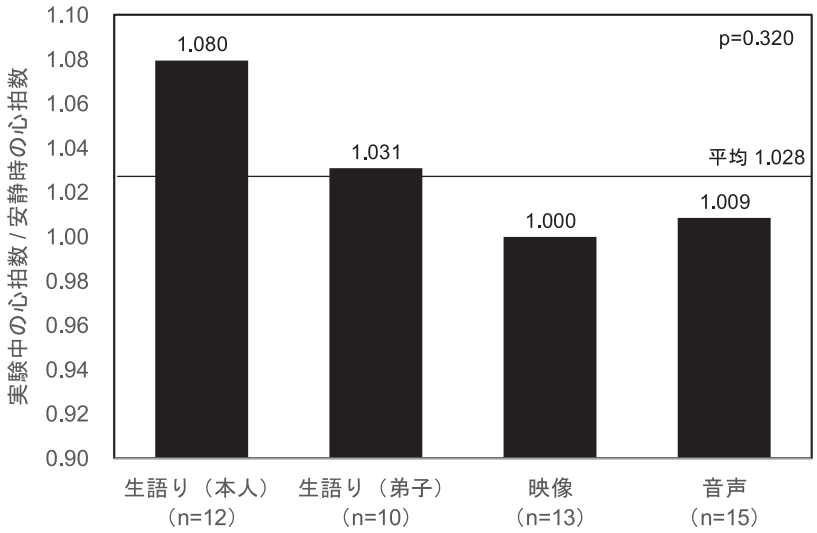

図3　実験中の心拍数と安静時の心拍数の比の群間比較[31]

最も心拍数が高くなったのは、生語り（本人）で1.080倍だ。次いで生語り（弟子）が1.031倍だった。この2つが他の媒体と比べてやや高く、「語り」を聞いたことによって生理反応があったことがわかる。他にも映像が1.000倍、音声が1.009倍という結果より、映像による生理反応が最も低いことが分かる。つまり、それぞれの媒体で大きな差はないものの、「語り」を受けたことによって心拍数は異なり、本人の生語りが最も影響を受けやすいことが明らかになったと結論付けている。

佐藤らは、次に心理変化について着目している。この実験では、参加者が「語り」を聞いたことによって、どのような感情の変化があったのかを測る。事後質問紙で感情尺度を調べるため、各項目の質問に対して参加者が回答し、それを得点化した。同尺度は、8因子各5項目で構成されており、各項目の感情状態に対して参加者が「全く感じていない」場合は1点、「あまり感じていない」場合は2点、「少し感じている」場合は3点、「はっきり感じている」場合は4点とした。質問項目は5項目あったため、各因子の最高得点は20点である。それぞれの群の回答結果をまとめたものが下の図である。

[31] 出典は脚注23に同じ

因子		平均値（SD）				
		生語り（本人）	生語り（弟子）	映像	音声	テキスト
抑うつ	事前	12.2（4.5）	9.8(3.8)	12.2(3.3)	11.7(3.8)	11.6(4.6)
	事後	11.4（3.4）	11.9(3.7)	11.7(2.8)	12.6(3.0)	12.2(2.8)
敵意	事前	7.0（3.1）	5.8(1.3)	7.5(2.4)	7.6(3.8)	6.8(1.8)
	事後	5.7（0.9）	6.4(2.2)	7.6(3.4)	7.4(3.0)	7.2(2.7)
倦怠	事前	12.7（3.5）	9.7(3.1)	12.2(2.9)	11.3(3.3)	12.6(3.2)
	事後	10.5（2.8）	9.8(2.6)	10.7(3.2)	10.8(2.6)	9.6(2.8)
活動的快	事前	9.0（2.3）	12.7(3.3)	11.4(3.0)	11.7(2.3)	10.6(3.6)
	事後	6.9（1.7）	8.3(2.9)	8.4(2.1)	8.3(3.0)	7.2(2.3)
非活動的快	事前	12.6（4.4）	12.6(2.2)	12.7(2.9)	12.8(3.2)	11.4(2.7)
	事後	8.3（3.0）	8.3(2.1)	9.4(2.9)	9.0(3.0)	7.9(3.2)
親和	事前	9.4（3.0）	9.4(3.6)	10.9(3.0)	10.2(3.7)	9.2(3.2)
	事後	8.3（3.0）	8.8(3.6)	10.3(3.2)	10.2(3.9)	9.3(3.1)
集中	事前	12.9（3.1）	12.6(3.1)	12.8(4.0)	12.8(3.7)	10.5(2.9)
	事後	9.9（3.5）	11.0(3.8)	13.2(3.1)	12.4(3.0)	10.2(3.9)
驚愕	事前	6.5（2.2）	9.3(3.9)	8.0(2.4)	7.8(3.1)	7.5(3.0)
	事後	11.8（4.2）	13.3(4.3)	13.4(3.5)	14.5(3.0)	13.5(4.0)

表3　語りによる感情変化の群間比較[32]

分析の結果、だるい・疲れた・つまらないなどを含む倦怠因子は「語り」を聞くことによって下降していたという。また、活気のある・気力に満ちた・元気いっぱいのなどの活動的快因子、のんびりした・おっとりした・ゆっくりしたなどの非活動的快因子のどちらも下降していたという。一方で、びっくりした・驚愕したなどの驚愕因子は「語り」聞くことによって上昇していた。このように、「語り」を聞くことで群関係なく全体を通して倦怠と活動的、非活動的快が下降し、驚愕が上昇している。つまり、話を聞いているうちに楽しさや快活さがなくなっていき、驚きが大きくなっていったと考察している。その中で、活動的快の-4.3点、非活動的快の-4.3点が生語り（本人）によって事前と事後で最も大きく点数の差があった項目であった。この結果より、本人による生語りが、最も参加者の感情を下げており、他の媒体に比べて気持ちが変化しやすいことが分かったと述べている。

佐藤らの研究により、非言語的行動を巧みに使うことによる当事者の「語り」が、物理的にも受け手の感情が操作されやすく、最も効果があるのだと言える。このような効果は文字を「読む」ことでは得られないものであろう。では、実際の語り部のお話はどのように展開し、どのような表現効果を発揮して、聞き手の胸を打つ「語り」になるのだろうか。Ⅳ章では、筆者が2024年1月に実際に研修旅行で受けた語り部の方のお話をもとに、内容を分析していきたい。

Ⅳ　語り部の内容分析

(1) 研修旅行で経験した語り部

2024年1月、震災学習がテーマの3泊4日の研修旅行で東北を訪れた。本節では、現地で伺ったお話をもとに2人の「語り」を分析してみたい。

語り部の1人目は気仙沼市東日本大震災遺構・伝承館で出会った佐藤瑞記さんだ。この伝承館では「将来にわたり震災の記憶と教訓を伝え、警鐘を鳴らし続ける『目に見える証』として活用し、気仙沼市が目指す『津波死ゼロのまちづくり』に寄与することを目的」[33]としている。また、

施設内を語り部ガイドによる案内で津波の爪痕を間近で見ることができる。今回の研修旅行では、佐藤瑞記さん[34]のガイドと共に震災学習を行った。施設を見学し終わった後は、振り返りワークショップを実施してくださり、感じたことや震災に対しての思いを付箋に書き連ねた。下の資料は1月に佐藤さんの「語り」を聞いたときのメモから作成した話の概要である。

【佐藤瑞記さんの「語り」】

当時小学校1年生だった私は、震災が起こったとき、下校中だった。ドーンと地面が鳴っていて、何が起きたのか理解できず、状況がつかめず、怖くなって必死に海沿いにある自宅に帰ろうとした。走って家に向かっている途中で、ある男性に声をかけられた。
「避難所までの道が分からない、教えてほしい。」
家族と離れ離れになった私は、不安で仕方なかったので断ろうと迷ったが、
「早く！」
と急かされたため、案内することにした。男性を避難所まで連れて行っているうちに気がついたら自分も高台に避難していて、その時には第一波は到達していた。私の両親は既に同じ避難所に逃げていて、そこで再会できた。あのまま声をかけられずに家に帰っていたら、津波に巻き込まれていただろう。考えただけで恐ろしくて仕方ない気持ちになる。
私はこの震災の記憶がある最後の世代だ。「この経験を語り継がなければいけない」という使命感から語り部活動を始めた。

資料1　宮城県気仙沼市の語り部佐藤瑞記さんの「語り」概要
2024年9月1日筆者作成

私達高校生と歳が近いからこそ、地震が起きたときの「何が起こっているのか把握できない」という気持ちが強く伝わり、佐藤さんの「使命感」に大いに共感した。佐藤さんは、「語り」の中で「早く！」など当時発したそのままのセリフや「ドーン」といったオノマトペを使っている。直接話法やオノマトペにより、場面を頭の中で想像して聞くことができるため、臨場感を十分に感じられた思いがした。気仙沼伝承館の語り部は自分たちの経験を後世に伝えるため、積極的に語り部活動を行っているそうだ。旧向洋高校であるこの建物を、被災した状態からそのままにして残すことを決めたのも、日本中に震災の恐ろしさを知ってもらいたいからだったと言う。文字を読むよりも、対面で実際に声を聞くことの方が、目の力の強さや息遣い、言葉に込められた迫力等が感じられ、震災の様子や人々の思いが伝わることを経験した。

2人目は大槌町で出会った岩間敬子さん[35]だ。岩間さんのお話も、研修旅行時のメモから以下の資料にまとめた。

---

[32] 出典は脚注23に同じ
[33] 気仙沼市東日本大震災遺構・伝承館ホームページ（2019）https://www.kesennuma-memorial.jp/　2024年9月1日閲覧
[34] 2024年1月現在、宮城県気仙沼市東日本大震災遺構・伝承館で語り部ガイドとして活動する他、気仙沼市を復興する数多くのイベントに参加している。震災当時小学校1年生。
[35] NPOが運営する「復興食堂」のおかみを経て、2013年から語り部ガイドとして活動している。現在では「一般社団法人おらが大槌夢広場」の理事を務める。震災当時49歳。

【岩間さんの「語り」】

大槌町では10mの津波が押し寄せた。大きな地震が起きて、町の人々は、今まで行っていた避難訓練で使用していた寺に避難して一安心していたが、（短い間）その寺にも津波が到達してしまった。（長い間）目の前で黒い波に飲み込まれる人、必死に手を握って流されないようにしている人、あの場面を思い出すことも嫌になるほど辛い記憶だ。

この町を襲った悲劇は津波だけではない。三日三晩燃え続ける大火災が発生した。町中が火の海になり、思いもよらぬ火災で町人の1割が亡くなった。（長い間）後の調査で火災当時の町の温度は1000～2000℃にも及ぶと推測された。それは、（短い間）人の骨まで焼き尽くす温度で、震災から13年経った今でも遺体が見つかっておらず、家族の帰りを待つ人が多くいる。

〈以下インタビューをした時にお話してくださった内容の要約〉

大槌町の復興は9年ほどかかった。街開きが行われたのは2019年あたりである。震災から6、7年は立入禁止になっており、人口も減り、他の地域に比べて長い時間がかかった。町の中心にあった役所を震災遺構として残すか、長年議論してきたが、多数決の結果取り壊す結論に至った。それは、誰の目に留まる位置にある役所ををを見て、辛い記憶を思い出したくないからであった。

資料2　岩手県大槌町の語り部岩間敬子さんの「語り」概要
2024年9月1日筆者作成

岩間さんの「語り」の特徴は、方言（資料では文字に起こせていないが）と間の取り方だった。お話の中で、津波やたくさんの方が亡くなったところで長い間があったことにより、重々しい空気が生まれ、震災の記憶の辛さがいっそう強く受け手に伝わってきた。震災当時に大人だった岩間さんには、佐藤さんとは違う景色が見えていた。被災した建物を震災遺構として残すか、もしくは取り壊すかの討論から復興するまでの記憶を、当時の葛藤する心境を交えながら話していただいた。加えて、高い年齢層の語り部の方が使う、方言を使用なさっていた。地域特有のイントネーションや語尾に触れると、岩間さんの言葉一つ一つに、その地域への愛着がダイレクトに込められているように感じ、まるで自分もその場にいたかのような実感を伴いながら話を聞くことができた。

私達はこの2人の語りを、被災した地を一緒に歩き、今でも被災の跡が残る物を紹介してもらいながら聞いた。実際に自分の足でその地を訪れて目を瞑ると、いつもは清々しいと感じる海風が冷たく感じた。写真で見た、震災前とは随分と風貌が変わってしまった街並みに囲まれ、あたりが静かで語り部さんの声しか聞こえない空間で、ただただ圧倒されながら聞き入った。今までテレビやネットや教科書の中でしか知ることのなかった東日本大震災のありさまを、現地にて、生で、当事者の肉声で聞くことができ、映像や本では感じなかった緊迫感が伝わり、本当に現実で起こったことだったのだということを初めて実感することができた。

(2) 実際の語りの展開

本節では、「語り」の内容や構成、しぐさや参加者の反応に注目し、実際に語り部の方の話を聞くことはなぜ胸を打つのか考察していきたい。ここでは内容がどう展開するのか分析してみることにする。分析するにあたって、まずは、名取市閖上在住の大友貞子さんの動画の記録を扱うこととした[36]。大友さんは震災当時、名取市閖上7丁目在住で津波によって家が流出し、娘さんを亡くされた。震災後は増田で生活している。大友さんの「語り」を文字に起こして、以下の表にまとめてみた。

[36] 名取市（2015/03/26）「大友貞子さん『閖上の記憶』」『名取市東日本大震災「語り部」の記録映像～震災を語り継ぐ人々～字幕版』43:23~1:03:43著作・制作/宮城県名取市 https://youtu.be/ifjU6O37Jo0?si=QDrxJXYKAY4JRlTm 2024年9月3日閲覧

No	オリジナルIU	大友さんの特徴	参加者の反応
1	ずっと閖上で暮らしていた		
2	焼きカレイが有名で早朝３時から漁にでている人が多かった		頷く
3	空間勘定を楽しみにしていた		
4	魚が大量に見えると巾着のように回って網を絞り上げて獲った		
5	大漁に取れると唄をうたっていた	大友さんが実際にうたう	笑顔になる
6	台所のものがドーンと飛んでいく	手でジェスチャー	
7	「マンズラク」という地震のときのおまじないを唱えていた	何回も唱える	
8	大谷石の塀がダダダと崩れる	手でジェスチャー	
9	揺れが収まり立ち上がると床が物で散乱していた		
１０	座敷の方に行ったら仏壇も倒れていた		
１１	30分後くらいに息子が帰って来た		
１２	息子に「お母さん、津波が来るんだ早く逃げよう」と言われる	焦り気味にセリフを言う	
１３	小さいときから「地震がきたら津波の用心。昭和８年３月３日」と教えられていた		頷く
１４	でも閖上には津波はこないと言われていた		
１５	息子に急かされ位牌を探すが家の中が真っ暗で探せない		
１６	息子に「持っていかなくたってお父さん怒らないから早く逃げよう」と止められ	焦り気味にセリフを言う	
１７	通帳、お金、ハンコを持って家を出る		
１８	学校の先生をしている娘が卒業式だったので袴姿で迎えに来たが息子がいることに安心して行ってしまった		
１９	息子の車に乗って通りにでたら既に橋の向こうから車がいっぱいだった	「ズーっと」を手でジェスチャー	
２０	町の中はがらんとしていて人っ子ひとりいなかった	特徴的な方言	頷く
２１	親戚の家で一度降りたら車庫でストーブを炊いていた		
２２	少し降りて再び車に乗ろうとしたら「津波だー！」と叫ぶ人がいる	セリフで少し声が大きくなる	
２３	ハッと思って車の外を見ると瓦礫が目の前を通っていた		
２４	自分たちも川の水にスーッと流された		
２５	反対からきた強い勢いの波に押し返されて米屋の物置にボーンとぶつけられる	ぶつけられるジェスチャー	
２６	身動きが取れず「アヤァ困ったな」と思っているうちに水がどんどん入ってくる	特徴的な方言	
２７	米屋の２階の高さまであがる「何とかちゃん頑張れよ」と騒いでいる	セリフを何回も呟く	
２８	「ここの下に人がいるのよ、助けて、助けてください」と騒いでいた		
２９	車の窓を割って辺をみると瓦礫の下に人がいた		
３０	助けようとして手を伸ばすが瓦礫が邪魔で動かしてどかした	瓦礫をどかすジェスチャー	
３１	そのままその人を２階に上がらせて息子は車に乗ったままの私を助けに来る		
３２	「いいから、私はココで」といったら「何いってんのダメだから」と騒いでいると雪が降ってくる		
３３	「ああ、いいわ、どうせ。80何歳にもなって、このぐらい生きて。」と思っていた		
３４	「なに言ってんだ」と怒られていたので仕方なく車から出た		
３５	その瞬間黒くて大きい座椅子が流れてきた	「サーっと」を手でジェスチャー	
３６	瓦礫の上に座椅子をグーっとおさえたら座椅子が安定した	抑える仕草	
３７	フロントガラスからでてさっき助けた人が手を差し伸ばしてきた	立ち上がる	
３８	息子は私を後ろからドーンと押して２階にあげられて助かった	押す仕草	
３９	娘は津波に流されてしまった	淡々と語る	
４０	袴を着ていたのですぐに身元が分かって見つかった		
４１	私は亡くなった人たちに助けられたんだから昔の閖上のことを伝えて皆の役に立ちたいと思って語り部を始めた		
４２	その日その日を大事にしていかなければならないんだと思う	場面展開	
４３	自分のことは人の世話にならないで自分のことは自分でできる限りのことをして迷惑をかけないようにしようと思う		
４４	今まではそういうことは思わなかったが、こうなってみると娘や若くして亡くなった人のためにも役に立ちたいと思った		

表4　宮崎県名取市閖上の語り部大友貞子さんの「語り」に基づくオリジナルIU
2024年9月3日筆者作成[37]

大友さんの「語り」を聞いて、最初に感じた特徴は、戦時中にこの町がどのように賑わっていたかという、閖上の歴史から話していることである。とりわけ大友さんが子どもの頃の閖上の賑い方を詳しく語っており、自分の故郷に対して愛を持っていることを感じる「語り」だった。大友さんは方言を使いながら、古くからの言い伝えやおまじないも紹介していた。漁師の掛け声や子供の騒ぎ声を真似している場面もあり、参加者はその声に笑顔を見せていた。参加者は私達が研修旅行で岩間山の話を聞いたときのように、和やかな雰囲気の中で閖上をグッと身近に感じたことであろう。しかし震災の話になった途端、場の空気が一変した。東日本大震災前、大きな地震があった時に他の地域には津波が到達したが、この町には来なかったことから「閖上には津波はこない」と誰もが言っていたという。大友さんも当時、それを信じ切っていた。これはその地域で以前から生きている人にしか分からない言い伝えだった。

大友さんは、方言とオノマトペ、ジェスチャーを多用していた。さらに津波を語る際は「ドーン」や「バーン」などの擬音語を始め、音に合わせて手でジェスチャーをしたり、立ち上がったりと動きが多い印象であった。他にも、「早く逃げよう」や「助けて」などのセリフも多く口にしていた。声色は震災前を語ったときと同じであったが、当時を再現して焦り気味に言葉を口に

[37] 参考）佐藤翔輔,邑本俊亮,新国佳祐,今村文彦（2019）「震災体験の「語り」が生理・心理・記憶に及ぼす効果：語り部本人・弟子・映像・音声・テキストの違いに着目した実験的研究」『地域安全学会論文集』No.35、P.9表5「語り部M氏の語りにもとづくオリジナルIU」
動画引用）名取市（2015/03/26）「大友貞子さん『閖上の記憶』」『名取市東日本大震災「語り部」の記録映像～震災を語り継ぐ人々～字幕版』43:23~1:03:43著作・制作/宮城県名取市 https://youtu.be/ifjU6O37Jo0?si=QDrxJXYKAY4JRlTm　2024年9月3日閲覧

するようになり、そのせいもあり聞き手は生々しい情景が頭に浮かんだと映像から伺えた。「助けて、助けて」と2回繰り返して言っている場面が多く、それが一層現場の緊張感を促した。最後に大友さんの娘が津波の被害で帰らぬ人となってしまい、姿が発見された時の状況を語る場面では、感情がなく淡々と言葉を連ねて語っていらした。

映像では、参加者の方にずっとカメラが向けられていたわけではなく数分に1回映される程度だったが、過去の話を聞いている時は頷いている人が多く、伝統の唄をうたっている時には笑顔になっている人が見られた。そして津波のシーンではほぼ瞬きがない状態で大友さんを見つめている人がほとんどであった。やや聞き取りづらい方言もあったが、参加者はその場の空気感を感じ取り、文脈や雰囲気で方言の意味を自分なりに補いながら真剣に話を聞いているように見えた。

大友さんの語りは、町の歴史やかつての賑いなど熟知している情報を導入に取り入れ、その後震災時に見たそのままの景色の詳細を語り、震災前と震災後を比較しながら話を進めていた。大友さん自身がときには率直に、ときには言葉を選びながら届ける語りが、私達受け手の記憶に強く残ることとなる。

次に大友さんと同じく、震災当時閖上に在住していた大宮理香さんの「語り」について分析した[38]。大宮さんは、2013年から震災の語り部の会を立ち上げ、現在でも在りし日の閖上を後世に伝え残すため活動を続けている。大宮さんの「語り」も、以下のように文字に起こし表にまとめた。

No	オリジナルIU	大宮さんの特徴	参加者の反応
1	自己紹介	観光バスのガイド	拍手
2	津波が来た時にこの道を通った、車が大渋滞していた		
3	「皆さん車の運転はされますか？されますよね	参加者に問いかける	手を挙げる
4	日本人は列をつくる習性がある		地図を見る
5	もう少し先を進むと見える閖上小学校の３階で津波を受けた		
6	『なんで10号線を走る車、さっぱり出てごないの』って（思った）	方言特有のイントネーション	
7	こっちの右側が海になっていて、今は建物がいっぱい建っているんですけど	右側を指しながら	
8	『なんで波、あの人たちでてこないの』って上りも下りも波を受けるまで、車から人が出てこなかった		
9	ダーンと波を受けて、その波を受けた車は、		
１０	「皆さん東部道路という高速道路を通ってここにいらっしゃいましたか？」	参加者に問いかける	
１１	そこまでずーっと流れていった		
１２	「みなさん津波の映像をテレビで見た時に、上空からの写真とか映像だったと思います。」	「上空から」で上から手をかざす	
１３	上からだと(津波が来ているのが)わかりやすいけど、同じ高さから見ても津波って来てるかわからない、感じられない		
１４	「この大型バスで『ワーッ津波だー』って見えたとして皆さん逃げますか？	セリフの部分で声が高くなる	
１５	逃げたとしてもどの道を使いますか？	見える範囲の道を指差す	
１６	入れる道決まりますよね、この道はいれません。もちろんこんなあぜ道は入れないです」	「こっち」「あっち」で指差す	
１７	前も後ろも右も左も渋滞を起こしている状態で逃げられるかと言われたら難しい状況だった		外を見つめる
１８	その時車の中にいたおばあちゃん曰く『逃げるの（車から脱出すること）が大変だった』	方言特有のイントネーション	
１９	『シートベルト外さんねんだおんな』って言ってた	方言	
２０	波に飲まれると衝撃でシートベルトがグンッしまってきて	オノマトペ、手で波のジェスチャー	
２１	慌てるからガチャガチャ開けようとする、そうすると余計にあかない	オノマトペ	
２２	シートベルトを外しても、今度は『窓開がね』	方言	
２３	「皆さまの車、窓手動ですか？自動ですよね、けっこう今」	手動でジェスチャー	
２４	自動で開く窓であったらエンジンが止まると窓も開かなくなる『窓あかなかった』	セリフで首を振る	
２５	『じゃ、おばあちゃんどうやって逃げたの？』と聞いたら、物がガツンとぶつかって窓に亀裂が入って蹴っ飛ばして抜けた	ガツンで軽くパンチをする	
２６	『そうだったんだ、なんでわたし、小学校から見ていてみんな早く車からでて上に上がったらいいさ』と思ってた	方言	
２７	『上がらんねよ、波に飲まれてしまったらそんなことできない』と言われた	方言	
２８	この道路にはたくさん商店が並んでいて、店と店の間は幅狭く、自転車１台通るのがやっと		
２９	「資料でいうと前のページに戻ります」	資料をめくる	写真を見ている
３０	「１１ページの消火栓の赤い看板見えませんか？それがこの看板です」	実際の看板を車内から指差す	お互いに教え合う
３１	車の外にでて慰霊碑を案内。「ここに親友であるママ友の名前が書いてあります。旦那さんとともに」	名前を指差す	
３２	彼女は震災当時、沿岸部から離れてテニスをしていたはずなのに『なんでここに名前あるの？』と思った	ボールを打つジェスチャー	
３３	彼女の仕事はホームヘルパーで、当時命を預けられているおばあちゃんが２人いた→助けに行った		
３４	彼女は津波から1ヶ月後に見つかった。旦那様の名前もここにある。残されたのは女の子だけだった。	文字を指す	文字を見つめる
３５	この３年半大人の私でさえ生き続けることは大変だった。彼女にとっても（もっと）大変		
３６	私が語り部になったのは彼女が残した家族のような人がひとりも出て欲しくないから		
３７	自分の命を自分で守ることは、地域を守ること、家族を守ることにつながると意識を持っていたら違かったのではないか		
３８	自分の命に責任を持つことが愛する家族の命を守ることにつながると気付いた		
３９	年長の息子に『ママがもし(津波が来たとき)あなたの近くにいなかったとしてもあなたは閖上小学校の３階に逃げるんだよ』		
４０	『もし危険だ、閖上に10mの津波がくると分かってもあなたのために戻ることはできない	首をふる	
４１	あなたのためにも家族のためにも生き残らなければだめなんだ。だから1人でも逃げるんだよ』と言った		
４２	「皆様にも自分たちがどう逃げるか、自分たちの命に責任を持つことは実はつながっていることをわかってほしい」	笑顔で	

表5　宮城県名取市閖上の語り部大宮理香さんの「語り」に基づくオリジナルIU
2024年11月10日筆者作成[39]

[38] 名取市（2015/03/26）「大宮理香さん『閖上震災を伝える会』」『名取市東日本大震災「語り部」の記録映像～震災を語り継ぐ人々～字幕版』1:03:53~1:14:29著作・制作/宮城県名取市 https://youtu.be/ifjU6O37Jo0?si=QDrxJXYKAY4JRlTm　2024年10月30日閲覧

[39] 参考）佐藤翔輔,邑本俊亮,新国佳祐,今村文彦（2019）「震災体験の「語り」が生理・心理・記憶に及ぼす効果：語り部本人・弟子・映像・音声・テキストの違いに着目した実験的研究」『地域安全学会論文集』No.35、P.9表5『語り部M氏の語りにもとづくオリジナルIU』
動画引用）名取市（2015/03/26）「大宮理香さん『閖上震災を伝える会』」『名取市東日本大震災「語り部」の記録映像～震災を語り継ぐ人々～字幕版』1:03:53~1:14:29著作・制作/宮城県名取市 https://youtu.be/ifjU6O37Jo0?si=QDrxJXYKAY4JRlTm　2024年10月30日閲覧

大宮さんは、被災地を観光するバスのガイドを勤めながら語り部活動を行っていた。当時彼女が津波から逃げながら見ていた景色を目の当たりにしながら「語り」を聞くと、参加者は、よりその場に居合わせたかのような感覚になる。加えて、参加者に問いかけることも多く、聞き手に「もし、自分が震災当時ここにいたらどのような行動をとるか」を想像させる役割も担っていた。

一足先に閖上小学校に避難していた大宮さんは、屋上から町が津波に飲み込まれる瞬間を見ていた。大宮さんが上から見ていて感じた「なぜ津波が迫ってきているのに逃げないのか」という疑問を、その時車内で津波から逃げようと奮闘していたおばあさんとの会話や、「おばあちゃんどうやって逃げたの？」や「そうだったんだ」などのセリフと共に語っていた。参加者に問いかけるときや、当時の町の様子を語っている時は標準語を使っていたけれど、セリフの場面では方言を交えていた。単に言葉自体が異なるだけではなく、イントネーションの絶妙な違いも感じられた。このように参加者に話す時と会話文とで方言を使い分けることによって、聞き手にとって分かりやすく、かつ当時のリアルな状況を想像することができる。

大宮さんは津波で親友を亡くしている。介護ヘルパーの仕事で預けられたおばあさん二人の命を守ろうと沿岸部へ助けに行き、そのまま帰らぬ人となってしまった。大宮さんは、介護ヘルパーという仕事について「彼女の天職」と称していたが、彼女の震災で残された家族（一人娘）の気持ちを想い、自分の命に責任を持たなくてはならないという思いを語っていた。「大人の私でもこの3年半[40]生きていくのは大変だった。残されたあの子はどんな気持ちなのか」。このセリフに行き場のない怒りさえ感じられる。東日本大震災を通して大宮さんが何を思い、何を学んだのか、強く伝わりストレートに響く言葉だった。この言葉を語るまでは方言を多用していた大宮さんだったが、このやるせない心情を吐露しているときは方言を使っていない。また、文字を指したり資料を触ったりというジェスチャーもない。多くの人に分かる言葉で伝えなければという思いと、皆に分かりやすいような身振り手振りをする余裕もないほどの真剣さが伝わってくる。

今回の「語り」を通して、大宮さんが最も聞き手に伝えたかったことは、「自分の命に責任を持ち、自分を守ることは、家族を守ることにもつながる」ということだ。残された家族に寂しい思いをさせないように、多くの人に語り部としてそのメッセージを伝えている。当時大宮さんが実際に見た景色や身近な友人を亡くした経験から、大宮さんの言葉に一層力が増し、聞き手に説得力を与えている。津波が来たときの場面を再現しているときは、ひとつひとつのセリフを方言で語る他、パンチをしたり指を差したりと多様なジェスチャーを行っていた。対してその後のやるせない心情は方言やジェスチャー無しで語り、最後にどうにもできないことにただ首をふる。語り部の方々は、決して、意図的に方言やジェスチャーの使用の寡多を操作しているわけではないであろう。とにかく伝えるべきことを伝えるという一心で、おのずから身体が動き、語りに間が生まれ、方言が出てくるのではないかと推測する。語り部の方々からは、器用に計算した演技のようなしぐさや話し方は見てとることができないからだ。この、自然な形で表れる言語や非言語が織りなす「語り」が、教訓の形となって、私達の胸に届くのだ。

Ⅴ　胸に迫る「語り」

東日本大震災は、甚大な被害だったにも関わらず月日が経つにつれて継承が廃れていく。震災の経験や記憶は、日々「風化」に向かっていくことを避けられない。しかし、「平成の大災害」と歴史に名を刻む苦く辛い記憶は同じ悲劇を引き起こさないためにも引き継いでいかなければならない。記憶の引き継ぎのためにおこなう、場を共にして「語る」／「聞く」という動作は、書物を「読む」／映像を「見る」だけでは得られない迫真力を享受できる。当事者からの生語りはその時にしか出せない声色、方言、オノマトペなどの言語的行動の効果や、ジェスチャー、間などの非言語的行動の効果と結びついて私達の心に届けられる。

東北の研修旅行で出会い、災害について語ってくださった方は総勢6名だった。私達と同世代の、高校生で既に語り部活動を始めている人も多くいる。語り部である彼らに共通する思いは、自分たちと同じ思いを誰にもさせたくないということだった。思いは同じであっても、6人の中

[40] YouTube投稿当時は2015年3月26日

で同じ内容・同じ言葉で話す人は誰一人いなかった。それは、語り部一人ひとりが感じたものは同じだったとしても、その人自身の言葉が違うからだ。当事者からその時に出てきた言葉と、言葉以外の表現が交わることでより一層受け手の胸に迫る。本人による生語りは、新聞やインターネットの他メディアからでは伝わらない空気感、迫真力がある。

震災大国と呼ばれるこの国では、これからも大きな災害から逃れることはできない。だからこそ、辛い気持ちと向き合い語り部として活動してくださる方の「語り」に、積極的に耳を傾けなければならない。受け手側の私達もただ機会を待つのではなく、自分たちからその機会を探しに行くことが大切だ。記憶だけでなく思いや使命感を受け継ぎ、防災・減災に努める人を一人でも多く作っていかなければならない。

（11989字　原稿用紙30.0枚相当）

【参考文献および関連URL】

●石丸かずみ/保田明恵/平野智美（2013）『文庫ぎんが堂被災地復興で本当にあった忘れてはいけない話』イースト・プレス

●雁部那由多・津田穂乃果・相澤朱音（2016）『16歳の語り部』ポプラ社

●磯友輝子（2001）「話し手の非言語的行動が『話の上手さ』認知に与える影響：発話に伴うジェスチャーに注目して」『対人社会心理学研究』200,1

●亀田裕見（2013）「首都圏における方言の地域資源としての活用―通信調査の結果から―」『都市言語セミナー11』にてポスターでの発表

●佐藤翔輔（2020）「東日本大震災の被災地における震災語り部・被災地ガイドの年代・性別・区間分布」『東日本大震災特別論文集』No.9,2020.7

●佐藤翔輔,邑本俊亮,新国佳祐,今村文彦（2019）「震災体験の『語り』が生理・心理・記憶に及ぼす効果：語り部本人・弟子・映像・音声・テキストの違いに着目した実験的研究」『地域安全学会論文集』No.35

●竹田晃子（2012）「東北方言オノマトペ用例集（擬音語・擬態語）―青森県・岩手県・宮城県・福島県―」『国立国語研究所学術情報リポジトリ』

●中村敏枝（2009）「コミュニケーションにおける「間」の感性情報心理学」『音声研究』第13巻第1号

●西坂涼、古谷勝則（2018）「東日本大震災の震災遺構で活動する語り部ガイドの成立及び活動の経緯　―宮城県石巻市の語り部ガイドを対象にSCATによる分析を通して―」『日本観光研究学会機関誌』

●気仙沼市東日本大震災遺構・伝承館ホームページ（2019）https://www.kesennuma-memorial.jp/

●国土交通省気象庁（1996）「南海トラフに関する情報」『南海トラフ地震関連解説情報（第8号）』（2024）https://www.jma.go.jp/jma/kishou/info/coment.html

●高村昇（2020）「東日本大震災・原子力災害伝承館」https://www.fipo.or.jp/lore/about

●冨田静香（2009）「一般社団法人語り部協会」https://www.pref.ishikawa.jp/shinkou/dukurikyou/group/n093.html

●名取市（2015/03/26）『名取市東日本大震災「語り部」の記録映像～震災を語り継ぐ人々～字幕版』「大宮理香さん『閖上震災を伝える会』」1:03:53~1:14:29著作・制作/宮城県名取市https://youtu.be/ifjU6O37Jo0?si=QDrxJXYKAY4JRlTm

●名取市（2015/03/26）『名取市東日本大震災「語り部」の記録映像～震災を語り継ぐ人々～字幕版』「大友貞子さん『閖上の記憶』」43:23~1:03:43著作・制作/宮城県名取市https://youtu.be/ifjU6O37Jo0?si=QDrxJXYKAY4JRlTm

●NHKNEWS（2024）「『記憶がなくても』語り継ぐ29歳も阪神・淡路大震災語り部の今」に掲載の表「阪神・淡路大震災語り部の年齢層」（神戸大学山地久美子特命准教授調査）https://www3.nhk.or.jp/news/html/20240114/k10014320401000.html